2023年9月10日  川越教会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丸山　勉

私たちの人生の物語（2）

［創世記9章1節～17節］

神はノアと彼の息子たちを祝福して言われた。「産めよ、増えよ、地に満ちよ。地のすべての獣と空のすべての鳥は、地を這うすべてのものと海のすべての魚と共に、あなたたちの前に恐れおののき、あなたたちの手にゆだねられる。動いている命あるものは、すべてあなたたちの食糧とするがよい。わたしはこれらすべてのものを、青草と同じようにあなたたちに与える。ただし、肉は命である血を含んだまま食べてはならない。また、あなたたちの命である血が流された場合、わたしは賠償を要求する。いかなる獣からも要求する。人間どうしの血については、人間から人間の命を賠償として要求する。

人の血を流す者は 人によって自分の血を流される。

人は神にかたどって造られたからだ。あなたたちは産めよ、増えよ 地に群がり、地に増えよ。」

神はノアと彼の息子たちに言われた。「わたしは、あなたたちと、そして後に続く子孫と、契約を立てる。あなたたちと共にいるすべての生き物、またあなたたちと共にいる鳥や家畜や地のすべての獣など、箱舟から出たすべてのもののみならず、地のすべての獣と契約を立てる。わたしがあなたたちと契約を立てたならば、二度と洪水によって肉なるものがことごとく滅ぼされることはなく、洪水が起こって地を滅ぼすことも決してない。」

更に神は言われた。「あなたたちならびにあなたたちと共にいるすべての生き物と、代々とこしえにわたしが立てる契約のしるしはこれである。すなわち、わたしは雲の中にわたしの虹を置く。これはわたしと大地の間に立てた契約のしるしとなる。わたしが地の上に雲を湧き起こらせ、雲の中に虹が現れると、わたしは、わたしとあなたたちならびにすべての生き物、すべて肉なるものとの間に立てた契約に心を留める。水が洪水となって、肉なるものをすべて滅ぼすことは決してない。雲の中に虹が現れると、わたしはそれを見て、神と地上のすべての生き物、すべて肉なるものとの間に立てた永遠の契約に心を留める。」

神はノアに言われた。「これが、わたしと地上のすべて肉なるものとの間に立てた契約のしるしである。」

[1] 私たちは皆、ノアの末裔

ノアの箱舟の話を先週からしていますが、「私たちの人生の物語」という題でお話させて頂いています。と言うのは、これは私たちの人生と無関係ではない、いやむしろ極めて具体的な救いの物語として直結しているのではないかと思ったからです。ノアの箱舟の物語。神様は一度は心にこの罪にまみれた世界のすべてを一掃してしまおうと思った、しかしノアとその家族7人・計8人だけを滅ぼされなかった。動物たちも一つがいづつ、神様がノアに造らせた舟に入れられました。そしてこの世界に大洪水が起こり、1年経ち、神様は新しい大地を用意されました。そこから人類と動物たちの新しい歴史が始まった、そういう物語です。

ということは、今を生きる私たちは皆、ノアの末裔、ノアの家族の末裔、ということになりますよね。決して完全な人間ではありません、ノアもノアの子供たちも。しかし、神様に赦されながら、その神様が備えられた新しい大地の上で、彼らは生き始めた。私たちもそうなんだと思います。ノアとあの箱舟がなければ、また、主の憐みがなければ、今の私たちの存在は無いということになりますよね。

　「な～に、こんなのは神話」だとおっしゃるでしょうか。そんなことはありません。まあ、神々同士が嫉妬したり、戦ったり、のんだくれだったり、そんな私たちの人生にどうでもよい神話というのもありますけれども、これは、神様と私たちとの「契約、」私たちの「救い」の始まりを見つめさせようとしている書物です。

[2] 水の上に浮かぶ神殿、神の家

 まず思わされることは、神様は、人間とこの世界を憐れんでおられるということです。「憐れむ」というのは「憐憫」の「憐」です。「愛する」ということです。「哀れな奴」と言う時の「哀れむ」ということではありません。「哀れんでやる」と言う時は、人の心は冷めているでしょう。けれども本当の意味の「憐れむ」つまり「愛する」時には、心は動き、葛藤します。苦しみます。イエス様もこのようなことを仰いましたよね。「自分を愛してくれる者を愛したところで何の報いがあろうか、それは本当の愛なのか」と。神様が人間とこの世界を一掃されずに、ノアに箱舟を造らせたというのは、裁きを行わざるを得ない中にあって、ご自身の内側に戦いがあり、「愛」の方が勝っているから、救いの道を主は用意されたということではないでしょうか。その救いの設計図を、神はノアに託しました。

ノア自身も苦しんだと思います。これがいつ終わるかも分らないし、どこに導かれるか、導かれた後はどうなるのか、そこは生きられる場所なのか、ずっと漂流しているけれども、結局死を迎えるのであるなら、この舟は何の意味があるのかと、そんなことも頭によぎったかもしれないと思います。

私たちも「生かされている方がむしろ苦しい」と、時に思うことがあるかもしれません。どうでしょうか。私は先週もお話ししましたが、この箱舟はエルサレム神殿の大きさとほぼ一緒だということで、水の上に浮かぶ神殿、「神の家」がここに実現しているに等しいと思うと申しました。―神殿。あの有名な「嘆きの壁」ではありませんけれども、私たちは神殿、神の家の中で、どんなことでも神様に訴えて良いし、むしろそう場所を神様は用意して下さっているのです。その中で詩編の作者のように「神様、私の嘆きを聞いて下さい。答えて下さい」と訴えながら神様と旅をする、ということが出来るのではないでしょうか。教会という所もそこに来て泣いてよい場所なのだと思います。そういう場所が人間には必要です。

[3] 人間にもう怒りを向けない―虹の約束

今日読んで頂いた9章前半。ついにノアと家族、動物たちは新しい大地を得ました。そこで神様の言葉が語られていますね。「産めよ、増えよ、地に満ちよ」と新しい世界に生き始める人を祝福し、ここに動物たちも一緒にいるその理由が示されています。「動いている命あるものは、すべてあなたたちの食料とするがよい」と、神様はどこまでも人間を愛し、生かそうとされているのです。私たちは動物たち、魚たちの命を頂いて生きています。ですから正に「いただきます」の謙虚な気持ちが大事ですよね。神様がそれを許して下さっているのですから。

そして9:9以下にこう書かれています。「わたしは、あなたたちと、そして後に続く子孫と、契約を立てる。…わたしがあなたたちと契約を立てたならば、二度と洪水によって肉なるものがことごとく滅ぼされることはなく、洪水が起こって地を滅ぼすことも決してない」。そして神様は、大空にその約束のしるしを現します。12節です。「あなたたちならびにあなたたちと共にいるすべての生き物と、代々とこしえにわたしが立てる契約のしるしはこれである。すなわち、わたしは雲の中にわたしの虹を置く。」―虹。英語でrainbowと言いますが、bow=弓なのですね。それを空に置きますと言う訳です。「弓」とは戦いの道具です。神様はもうそれを使わずに空に置いてしまうのです。ある人は言いました。虹の弓は、神が地に向かって矢を放つ方向ではなく、天に向かって放たれるようにカーブしていると。神様はもう人間に怒りを向けない、その裁きはご自分に向けられる、つまり、わたし自身が責任を取ると。ですから私たちは虹を見る時に、そこに神様の憐れみのしるし、約束の確かさを思い起こして良いのだと思います。…それは丁度このあと「主の晩餐式」を行いますが、あのパンと葡萄液が、主イエス様の一方的な救いを示しているのと同じです。

イエス様は、パンを食し、杯を飲めと仰いましたよね。それを私たちは「体」で受け止め、味わいます。私はそのことが、神様がノアに箱舟を造らせたこととつながっていると思うのです。もし私たちの救いというものが、単に精神的なものであったなら、箱舟は必要ないと思うのです。箱舟は、私たちを“身体ごと”新天新地に運んでゆくのです。伝統的な信仰告白に「使徒信条」があることをご存じの方は多いと思いますが、その最後に「我は罪の赦し、体のよみがえり、とこしえの命を信ず」という一文があります。罪の赦しと、永遠の生命と、体のよみがえりとは切り離すことが出来ない事柄なのですね。私たちは、オギャーと泣きながら私のこの肉体を与えられてこの世界に送り出されました。それから何十年間自分の体と付き合って歩んで来られましたか？時に体なんて無い方が自由だなんて思うこともあるかもしれません。病気になったり、老いの辛さを感じたり…でも、それも含めて私たち自身、あなた自身です。また、食べたり飲んだり、汗をかいたり、誰かと手をつないだり、涙したり…それは全部私たちの人生の一部です。体があるから苦しいことも経験するけれど、深い人生の喜びも与えられながらここまで生きて来たと思います。そんな私たちのことを、神様はまるでノアの箱舟の中に置いて下さったかのように、そのまま包んで、約束の大地へと運んで下さったのです。今この時もそうですし、死を迎えてからも、私たちは全く新しい体を与えられて、御国でもしかしたら食べたり飲んだりするのだと思います。私はそれを信じます。イエス様が、最後の食卓で弟子たちに「父の国で飲む時まで、ぶどうの実から作ったものは飲まない」（マタイ28:29）と仰っているのですから。

[4] 「肉なるもの」を愛して下さる主と

そう思うと、この9章の中で、何度も何度も人間のことを「この肉なるもの」と言っていることに気付きます。15節から17節で4回も繰り返されています。15～16節を読むとこうです。「雲の中に虹が現れると、わたしは、わたしとあなたたちならびにすべての生き物、すべて肉なるものとの間に立てた契約に心を留める。水が洪水となって、肉なるものをすべて滅ぼすことは決してない。雲の中に虹が現れると、わたしはそれを見て、神と地上のすべての生き物、すべて肉なるものとの間に立てた永遠の契約に心を留める。」 私たちは他でもない、「肉なるもの」です。そしてこの体を持って、色々な人生の旅路を歩んでいる私たちを、神様は憐れんで下さり、見捨てることなく箱舟に乗せて、かの日に至るまで運んで下さる、いや、運んで下さっているのです！様々な助けや助け手を傍に与えて下さりながら。

そして、私たちは知っています。私たちの人生には主が共にいて下さる！と。どんな人生の嵐の只中にも、天には虹がかかっていると。「私はあなたを罪に定めない。行きなさい。もう罪を犯さないように」と励まし、共に歩んで下さる十字架と復活の主がおられることを。「わたしは世の終わりまで、いつもあなたと共にいる」（マタイ28:20）。お祈り致します。

主イエス・キリストの父なる神様、私たちをただあなたのご愛の故にノアの箱舟に、いえ、十字架というあなたの用意された確かな救いの舟に引っ張り込んで下さり、感謝致します。そのあなたの憐みの深さに驚くばかりです。

この具体的な体を持つ私たち自身を、あなたは愛し、そして贖って下さり、この地上だけではなく、新しい霊の体の約束と共に新天新地へと運んで下さるお約束を信じ、感謝致します。どうか主よ、まだまだキリスト教会はあなたのことを周りの者に伝えきれずにおります。憐れんで下さい。友のために祈る私たちにしてください。教会がいよいよ救いの器となって行けますように。主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。